
アルストリア国際製靴学校研修体験記

日程：令和6年8月24日－11月3日

廣瀬 恵子

はじめに

毎年開催されていた本派遣事業ですが、世界的なコロナウイルス蔓延の影響により、4年の間隔があき、昨年度より再開されました。かねてより参加を熱望しており、ようやく念願の「アルストリア国際製靴学校」へ留学することができました。

過去の体験記を読んだことで「行ってみよう！」と思うきっかけになり、また留学準備を整える際にも活用したので、今後の派遣に参加する方や興味がある方への参考になればと思い詳細をここに記させていただきます。

事前準備

現地でのコース開講に先駆け、事前学習するようにと、学校からイーラーニング用の動画が送られてきます。内容は靴のデザインの種類や名称、デザインをする上での注意点、材料や副資材についてなどです。17本、計500分の動画とそれにまつわる選択問題が用意されています。英語で説明している動画なので、実際の授業で使われる英語の勉強としても視聴必須の内容となっていました。このオンラインコンテンツは個人での購入が可能なので、留学が困難な方でもアルストリアの授業を受けることができます。

学校について

Arsutoria School（アルストリア国際製靴学校）（以下、「学校」という。）は1947年開校の歴史ある専門学校で、ファッションの中心地ミラノにあり、専門家の指導の下、靴やバッグの製作について学ぶことができます。

インターナショナルスクールということもあり、50か国以上の国から生徒が集まり、生徒のほとんどが留学生でした。月曜日から木曜日の週4日、9時から17時にかけて授業が行われ、金土日がお休みです。ビルの地下が学校となっており、建物上階は生徒のための寮になっているので、通学しやすく、勉強に集中できる環境が整っています。

クラスについて

私の参加した「pattern making and prototyping」コースは8月26日から10週間という期間で、レディースとメンズの基本的な革靴のパターンを学びました。本来は3か月のコースの前半のみの参加で、私の修了後、他の生徒たちはストローベル製法のスニーカーについて学んだそうです。クラスメイトは、私を含め、インド人3名、インドネシア人1名、アメリカ人1名の計6人。昨年は同コースに13名在籍していたそうですが、今年は6名のため、教室を広々と使え、個々の理解度に合わせた指導をしても

らえたり、コミュニケーションもとりやすかったです。

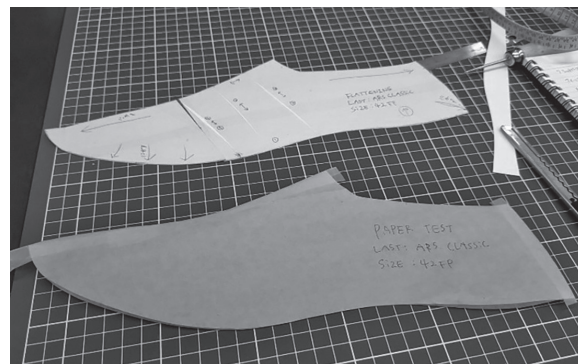
インドから参加した3名は国家公務員で、国から靴づくりを学ぶよう指示され派遣されたそうで、製靴経験がある者、バイオソールの研究をしている者など精鋭揃いでした。靴コースにも同僚がおり、帰国後は学校で学んだことを自国で広め、国として皮革産業を発展させるのが目的だそうです。インドネシアからの生徒は、家業で靴工場を営んでおり、祖父も卒業生だったそう。アメリカからの生徒は靴コースに入る前に靴コースを受講しており、学校やミラノでの生活は慣れた様子でした。皆、初心者ではなかったので、授業の進むスピードも速く、質問内容も高度でした。



授業について

講師は2名体制で、手本を見せ、その通りやることを重んじる先生と、やり方を教える前に自分でまずは考えさせる先生の2通りでした。どちらの先生も手元をスクリーンに映し、作業を説明してくれるので、英語が得意ではなくても、視覚的に理解することができました。

学校では、型紙はまず木型にテープを貼り、ベースシェルと呼ばれる原型を作ります。その原型に対して平面上でデザインを作図するのが、木型に直接デザインを描く



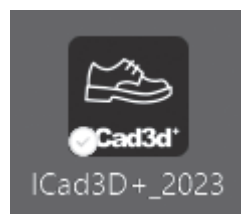
ベースシェルとペーパーテスト

日本での手法と大きく異なる点でした。

最初はプレーンパンプスやバレリーナなどパーツの少ないレディースから始まり、サンダル、ローファーと徐々に難易度が上っていきます。ダービー、オックスフォード、アンクルブーツなどはメンズとレディース両方同じ工程で作図しますが、用いられる規定値が異なるので注意が必要でした。

教室には様々なデザインのサンプルが蒐集されており、必要に応じて解説に用いられます。個人で自由に見ることができたので、休憩時間に観察してみました。日本にはない手法の靴が多々あり興味深かったです。

また、昨年度のシラバスからCADの授業のコマ数が大幅に増えたようで、自前のパソコンが必須でした。必要なスペックを指定されるので、それを満たす機種を持参

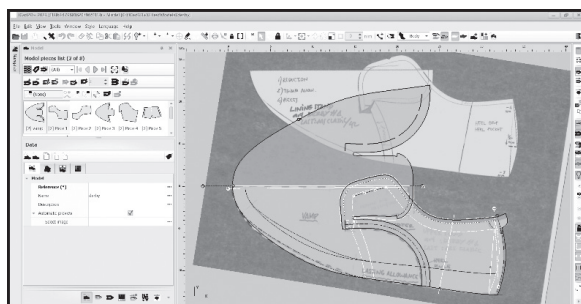


しました。使用したソフトは「ICad3D+」というもので、靴に特化したCADソフトです。授業では2Dのみでしたが、木型を購入する

と、木型メーカーから3Dデータが送られるので、その木型データに対しパソコン上でデザインを描画し、一切の手作業なしで完結することもできます。上下左右どの角

度にも回転させラインを確認することができるので、導入できればとても便利そうでした。

2Dでは、自分で作図した紙のデザイン型をスキャンして取り込みトレースし、決め型や裁断型を作るために展開していきます。慣れないソフトで四苦八苦する場面もありましたが、一瞬で代^{しろ}つけることができ、間違えた場合もすぐに取り消せるのでとても効率的でした。グレーディングもあつという間で、データを自動裁断機に送信すれば、簡単に型紙ができます。革の裁断もこの機械でできるので、型紙があっているか確認する仮アップ^しの製作も容易でした。



ICADによる外羽根作成

それぞれ専門の講師が加わり、製甲と底付けの実技の授業も数日ありました。学校には珍しい機械や最新の機械が揃っているので、実技の授業の時は生徒は皆興味津々でした。日本とは異なるテクニックや道具を用いることがあり、それも面白かったです。日本ではサライに市切りを使いますが、イタリアに限らず諸外国ではハサミを使います。なのでハサミでさらせるようにまとめ方を工夫する必要があり、「日本だったらここでさらせるのに…」と日本の靴づくりの効率の良さを実感する場面もありました。

毎週月曜日には前週に習ったことをちゃんと理解できているかを確認するテストが

あります。最終週には卒業試験があり、これに合格しないとディプロマ（修了証書）がもらえません。型紙作成の試験は紳士か婦人かを任意で選択でき、そのうえで複数のデザインからくじで決まった1枚のデザイン画をもとに型紙を作ります。資料の持ち込みはできず、スマホも没収される厳戒態勢の中、制限時間内に作成します。口頭試験では各国で用いられている異なるサイズ表記を換算する問題が出題されました。

寮について

寮は真新しく清潔で、周辺環境も静か。Wi-Fiも完備で、エントランスはオートロックです。徒歩圏内にスーパーが複数あり、とても生活しやすかったです。私の階はワンフロアに6部屋あり、キッチンと洗濯機は共同ですが、洗面台とシャワーとトイレは各部屋についていました。

隣室の生徒は熱心に課題に取り組んでいて、寮でも卒業制作を進められるように、学校からミシンを借りてキッチンで製甲していました。

展示会について

派遣期間中に靴や靴の材料の展示会「LINEA PELLE（リニアペッレ）」と靴の展示会「MICAM（ミカム）」が開催されました。授業として見学する訳ではないので



すが、半数以上の生徒は、欠席してでも展示会に行っていました。

リニアペッレは実際にものづくりをしている者にとっては必ず行った方が良い展示会です。イタリアやヨーロッパのみならず、世界中のタンナーが自慢の革をズラッと並べ、新素材や副資材も豊富で、全ブースを見ようとすると1日かかりでした。

明確な目的があり、探しているものがはっきりしていれば、商材を見せて親身に解説してくれます。逆に学生だとわかるとあしらわれることもあるので、自分がどんなことをしていて、どんな材料や技術を探しているのか、英語で説明できなくてはなりません。アルストリアの卒業生の靴デザイナーは、買った高そうな革のサンプル帳を持ちきれないほど無料でもらっていました。

今回は1000社ほどの出展でしたが、日本からの出展は1～2社程しかなく、アジアの中でもかなり少ない出展数だったことが残念です。注目すべきは大量生産の分野で、中国系の企業の占める割合の多さです。その他ベトナムや台湾などもイタリア企業よりも多い印象を受けました。また、展示している企業数に対し、観客は少なく、閑散としている印象だったことも気になりました。観光地には人が戻っていることからコロナの影響というわけではなく、



オンラインでの情報収集が容易になった背景があげられるかもしれないと思いました。

国内外の靴博物館や靴屋見学

以前は授業として靴工場の見学や、リニアペッレ本部の視察があったようですが、今回は一切校外での活動がなかったので、自分から行動を起こす必要がありました。休日を使いイタリア国内外の靴博物館やアトリエを見学したので、その中でも特におすすめの情報を以下に記載します。

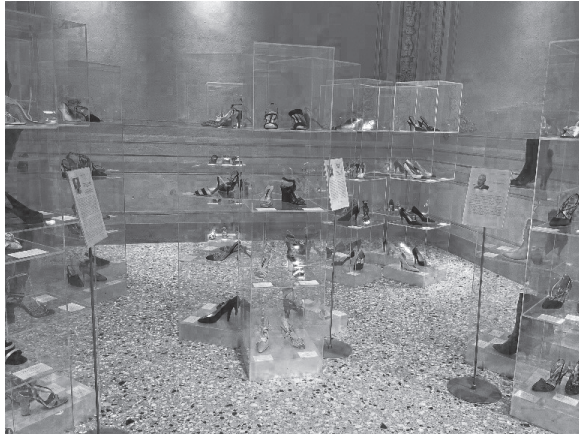
①Vigevano

ミラノから電車で1時間ほどの距離にあり、駅から出ているミニバスに乗れば、材料屋も数店ある。郊外らしさがある古い町並みも魅力で、町の中心にある広場はレオナルド・ダ・ヴィンチによる設計らしい。また、そこには靴の博物館があり、展示されている靴は世界各国の歴史的なものから近代の靴まで幅広く揃っていた。



②Museo della Calzatura di Villa Foscari Rossi

ヴェネチアから西に30kmほどの場所にある、主にハイブランドのレディースシューズを展示している大規模な博物館。360度ぐると鑑賞できる展示ケースに入っているのも、細部の繊細な装飾がよく見える。ミュージアムショップで販売して



いる靴関連書籍が豊富で、販売していないものも許可を得ればコピーや写真を撮らせてもらえた。

③Palazzo Gucci(フィレンツェ)

撮影映えするような照明やプロジェクター、ディスプレイなど、魅せ方がグッチらしく素晴らしい。訪問時は鏡張りの部屋にBanbool1947が天井までずらりと並べられていた。小規模ではあるが、毎回がらっと内容が変わるので、展示替えが楽しい博物館。

④Museo Ferragamo(フィレンツェ)

各年代を代表するフェラガモの靴が時系列で並べられ、変遷が見てとれる。作り方が想像できないような靴のスケッチや設計図の展示が興味深かった。

⑤ノーサンプトン (イングランド)

この街は靴産業が盛んで有名ブランドのファクトリーショップも複数ある。

「Northampton Museum and Art Gallery」には常設で誰でも見られる靴関連の展示があるが、事前に交渉し、展示されていない貴重なアーカイブ見せてもらうことができた。

まとめ

ミラノでバッグデザイナーとして働いている卒業生と仲良くなり、現在の生活について話を聞く機会があった。彼女曰く、学校周辺の一人暮らし向けの物件の家賃相場は約1000ユーロ。対して新卒の月給は1300～1600ユーロ。高い学費を払って卒業しても楽な生活はできないそう。スペインの靴工房を伺った際には「仕事は大変なのにお金にならないから靴職人を志す若者がいない」という話も聞きました。若い担い手不足、低賃金は東京の靴業界でも抱えている問題です。

イタリアでは、型紙は手作業からデジタルへ移行しており、講師の先生は「CADはあなたのことを助けてくれる。使わない理由がない」と断言していました。中小企業の多い日本の企業では初期費用のかかるCADの導入のハードルは高く、浸透していると言い切れないのが現状だと思います。なのですぐにできそうなことから始めようと、帰国してからは手作業と併用して、Adobe Illustratorを使ったグレーディングや、レーザーカッターによる型紙出力や革の裁断に挑戦しています。

今回留学できたことで、型紙の知識をアップデートするとともに、新たな技術に取り組むきっかけになりました。イタリアではとても有意義な2カ月を過ごすことができ、このような機会を与えていただいた関係者の方々には感謝でいっぱいです。この派遣事業が今後も実施されていくことを切に願います。